パニック・ソウル！

森小市旬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パニック・ソウル！

【Ｎコード】

Ｎ４０６９Ａ

【作者名】

森小市旬

【あらすじ】

突然化け物に殺された少女を生き返らせた謎の少年。少女のうなじに突然現れた謎の鎖。その鎖によって引きよせられた先には少年あり、化け物あり！？少女は英雄か、それとも単なる奴隷か。少女の笑いあり涙ありの超絶バトルストーリーが始まる！！……はず。

プロローグ～出会い～（前書き）

少しだけ楽しんでいただければ満足です。他にも書き途中のあるけど、そっちはいきあたりばったりでどこまで行けるかの挑戦。この作品は構成への挑戦。ということで、少しはしっかりしてるの作ってくつもりなんで、よろしくお願いします。

プロローグ～出会い～

目の前に浮かぶ信じられない光景。血の海。その中に俯せに倒れている『自分死体』。そして、自分の死体の正面に立つ化け物の姿。鬼のような角に大きく釣り上がった目。大きく裂けた口。体は人間のものの様に見えるが手足の長さが異様に長い。
その光景を見つめている少女は、あまりに突然奪われた自分の生を、その現実を受け入れられずにいた。いや、受け入れられるはずがなかった。
都内の高校に通う彼女は、いつもの様に部活を終え、いつもの道を家に向かって急いでいる最中だった。見たいテレビがあった。帰ればお母さんが用意してくれた夕飯が待っている―今日は彼女の大好物のカレーのはずだった。そのカレーを食べながらテレビを見るはずだった。
この道が心霊スポットだとは知っていた。しかし、私には霊感もないし、そういうのは信じていない。
そう、たまたま彼女は今日ここを通った。カレーとテレビ。この二つの誘惑が、たかが2分程度の時間短縮のために彼女をこの道に誘いこんだ。そして、今、目の前に立つ化け物に出会い、殺された。
彼女―『佐倉奈緒』の人生はここで幕を閉じた。

目の前の化け物と自分の死体を見つめ、奈緒はやっと、今自分がどういう状況にあるかを把握した。そして、その顔を一瞬にして歪ませると―…
「あ………い、いやぁぁぁぁぁぁっ！！」
と叫ぶと同時に、その場に崩れ落ちた。
化け物は死んで霊となった奈緒を凝視していた。そして、奈緒が泣き崩れ、その絶望がピークに達したとき、その口をゆっくりと開

き、奈緒に近づいてきた。そして、泣き崩れる奈緒を上から覗き込むようにすると、一気に口を全開にした──…と、その時であった。
周囲に轟音が響き渡ると共に、化け物の体が宙に浮いた。
「？」
化け物が訳がわからないといった様子で目を丸くした。と、その時目の前に一人の少年が出現した。
単髪、黒髪。目付きは厳しいがどこか虚げ。そして、上半身には服を着ておらず、その代わりに赤い包帯のような物が指の先までぐるぐる巻いてある。
「ガァァ！」
『食事』を邪魔された化け物は怒り、目の前の少年に腕を伸ばした。
しかし、少年は化け物の腕を楽に払いのけると、蹴りを一発化け物の腹にかました。化け物は吹き飛び、１０メートルほど先の地面にめり込んだ。　奈緒の前に着地した少年は、奈緒に向かってこう言った。
「よぉ、お前を助けてやろうか？」
奈緒は涙を浮かべる目で少年を見上げた。
「え………？」
少し驚いたように呟いた。すると少年は奈緒に向かい、もう一度言った。
「お前を助けてやると言ったんだよ。生き返りたいだろ？」
「そんなこと………できるの？私、生き返ることができるの？」
半信半疑で奈緒は少年に聞き返した。すると、少年は奈緒を見て、少し不気味な笑顔を見せた。
「ただし、交換条件だ。」
少年は奈緒の耳元で何かを囁いた。すると、奈緒は少し迷ったようなそぶりを見せ、決心したように呟いた。
「………分かった。でも、ちゃんと生き返らせてよね………」

少年は満足げな笑顔を浮かべると、既に立ち上がり、少年のすぐ後ろまで迫っていた化け物の方に向き直る。
「お前こそ、この約束を絶対に忘れるな。」

そこで奈緒の記憶は途切れた。血の海に浮かぶ自分の死体。化け物。謎の少年。少年と交わした約束。
目覚めると自分のベットの中だった。
（あれは…夢？）
奈緒はベットで眠っていた。夕べは確かにカレーを食べながら楽しみにしていたテレビを見た。その記憶は確かにある。しかし、その記憶とは裏腹に、夢にしてはリアルな感触が、今も体に残っていた。死の実感、恐怖、絶望。そして、少年が囁いた言葉と吐息の感触が、確かに耳に残っていた。
（…気にしても仕方ないか。今、何時だろ。）
奈緒は枕元に置いてある時計を手に取ると、ありえないぐらいの大声をあげ、ベットから跳び起きた。

何気ない木曜日。８時２０分。今日の１限目は『鬼の酒井』こと酒井先生の国語のテストであった。天気は快晴。物語を始めるにはまさにピッタリの日和である。

プロローグ~出会い~（後書き）

プロローグだから、1000文字くらいで抑えたかったけど、1600文字くらいになり、ちょい失敗です。次回から2000文字くらいずつ書かなきゃなんなくなったなぁ…ということで、今後ともよろしくお願いします。

幕開け～胎動～

息がきれる。が、そんなことは言っていられない。とにかく必死の形相で奈緒は自転車を走らせた。
今日の1限目は『鬼の酒井』こと酒井先生の国語のテストがあるのだ。遅刻や欠席なんてしようものなら大変なことになる。
(なんで、こんな、必死に、チャリ飛ばさなきゃ、なんない、の、よっ！！)
奈緒は頭の中で悪態をついた。
(きっと、あの夢の、せい、だっ！)
そうこうしている内に学校の正門が見えて来た。『都立坂上高等学校』。奈緒が通う高校である。
正門をくぐり、自転車置場で自分の自転車に鍵をかける。正面玄関で靴を履き変え、奈緒の教室である『2－C』のある3階への階段をダッシュで一気に駆け上がる。そして教室へ――…
「ギリギリセーフ……ぶはぁ、はぁ、はぁ」
教室中の視線が奈緒に注がれる。幸にも、まだ酒井先生は教室に来ていないらしい。
息をきらせている奈緒に、入口のすぐ近くの席に座っている眼鏡の少女が声をかけた。
「奈緒、おっはよ。めずらしーねぇ、こんなギリギリに来るなんて。」
「あ、美里、おはよ。ちょっと寝坊してねぇ、久しぶりにチャリできた」
奈緒はにっと笑うと、美里と呼ばれた眼鏡少女に自転車の鍵を見せた。その時、『鬼の酒井』が教室に入って来た。「うーっす。はじめるぞー、皆席に着けぇ！」
見た目は普通のおっさんである。
『鬼』の二つ名とは違い、むしろ菩薩のオーラの様なものが感じら

れるくらい、優しい笑みをたたえている。奈緒も自分の席に着く。
そして、いつもどおり授業前の出欠がとられる。授業に間に合いホッとしていた奈緒であったが、自分の名前を呼ばれた次の瞬間、奈緒にとって予想外、いや、当然のことであるが失念したいた事態に気づかされた。「佐倉、お前、朝のホームルームに出てないな。遅刻か？」
（しまった…やっぱそれを見逃してくれるほど甘くないか。さすが鬼の酒井）
　その酒井先生の言葉にドキッとする。
　そこで奈緒は反撃を試みた。
「すいません、先生。今朝はお腹が痛くって、ちょっとトイレに…」
少し赤面気味に言うと、酒井先生は、ごほんっと咳ばらいを一回すると
「うむ…そういう事情なら仕方がない…」
というと、出欠の続きをとり始めた。
奈緒は、自分の容姿と普段真面目っぽく過ごしている事に感謝した。
校内の先生の間でも有名なほどの優等生であり（実際は単なる天才肌であり、居眠り等がバレる事がないようにする才能も他者を圧倒しているだけなのであるが…）、容姿も毎日告白してくる人が絶えない程のものを持つ年頃の女の子が、顔を赤面させながら『お腹が痛くてトイレ』などと口にしようものなら、おじさんの性としては、その場は見逃すしかない。そもそも、自分の授業には遅刻していない。後は担任の責任の範疇である。
（ふぅ…なんとかごまかせせたぁ…）
　最悪の事態を回避した奈緒は安心すると心の中で安堵のため息をもらした。そして、配られたテストを解き終わり、とりあえず１限目が終わるまで一眠りすることにした。そこで、あくびを一つしようとした時であった。

――…チャリっ…―

不思議な音がした。奈緒は、自分の首のあたりから聞こえた気がして、首に手をあててみるが、特に何かがある様子もない。
（……気のせいか、まぁいっか。とりあえず一眠りしよ。）
そうして、テスト終了の合図があるまで、奈緒は眠りについた。
そうこうしている内に時間はすぎ、昼休みの時間になった。いつものように購買で焼きそばパンを４つ買い、いつものように屋上の花壇の前で仲のいい美里、智恵子、友実と夕べのテレビの話でもりあがる。
「でしょー！やっぱエビちゃん可愛いよね！」
「そうそう！あの情けない顔が妙に可愛いんだよねぇ、不思議～。」
「私はキモくてちょっと…ねぇ」
「目がおかしいんじゃない？」
そんな会話が次から次へと繰り出される。奈緒はその会話の中で少し安心していた。
（やっぱり、夕べのテレビちゃんと見てた。やっぱあれは夢だよね。あの夢みたいに私が死んでたら、テレビなんて見てられるわけないもんね…）
「あ、もうこんな時間」
美里が時計を見て言った。
「やばいよ、次の４限目は酒井の古典だっ」
「えぇ～、また酒井先生の授業？」
などとドタバタと屋上からの撤収準備を始める。
その時、また奈緒の首の辺りからチャリっという音がした。しかし、今度はドタバタの最中であったため、奈緒は特に気にしなかった。これが、奈緒と『鬼の酒井』の避けようにも避けられない壮絶バトルへの最終警告、いや、すでにその試練の幕が開いていることに、奈緒はこの時、気付くことはなかった。

そして、４限目が始まった。奈緒は古典の授業中はいつも眠ることにしている。居眠りをバレないようにするのは得意だ。
(春の古典はよく眠れるのよねぇ。)
そんな事を思いつつ、眠りに落ちた。それから、１０分程たっただろうか。奈緒は、首の辺りが誰かに引っ張られているような感覚で目が覚めた。
(ヤバイ！酒井先生にばれた！？)
しかし、授業は相変わらず坦々と続いている。奈緒はホッとしたが、それでも、確実に首の辺りが何かに引っ張られていた。
首の辺りを手で探る。すると、何か冷たい感触がした。鎖のようなものとすぐ気がついた。そう、自分のうなじの辺りから鎖が生えているのである。
(なに、これ？だんだん引っ張る力が強くなってる…ってより、なんで首から鎖が生えてんのよ！？)　奈緒の背中に冷汗が伝った。と、その次の瞬間、鎖を引く力がこれまでの何倍にも強くなる。
「え…！？」
思わず声を出した瞬間、席から体が離れ、後ろへ引っ張られた。いや、性格には、体は確かに席のイスに座っている。あえていうなら、幽体離脱、魂だけが首から生えた鎖によって引っ張られていく。離れていく自分の体を見ていた奈緒は、自分の体が机の上にバタンッと倒れる様子を見た。そこで、一度意識が飛ぶ。
教室では、突然机の上に突っ伏した奈緒に、教室中の視線が集まっていた。酒井先生も、突然の出来事に、どこか具合が悪くなったかと心配になり、奈緒に声をかけた。
「佐倉？どーした？どこか具合悪いか？？」
しかし、奈緒は反応を見せない。それどころか、すやすやと気持ち良さそうな寝息をたて、これまた気持ち良さそうな顔で眠っている。その様子を見て、それまでただの優しいおじさん風な笑顔を見せていた酒井先生の顔が、みるみる鬼のような形相に変わる。『鬼

の酒井』の覚醒に教室中の生徒が息をのんだ。明日ノイローゼに陥っている奈緒の姿を想像し、手を合わせる生徒すらいた。
「佐倉、可哀相に…」
誰かがぽつりと呟いた。

お尻にものすごい衝撃をうけ、奈緒は意識を取り戻した。そこは、学校から程近い公園であった。「いったぁ…なんなのよ、一体…」尻餅をついたらしい。とにかく立ち上がり、辺りを見渡す。公園。とりあえず制服も着てるし、怪我もない。具合が悪いわけでもない。何故自分がこんなとこにいるのか？その時、奈緒はハッとして首に手をあてる。ジャラッとする鎖の感触がした。
その時、目の前に何かが立っていることに気付き、顔を上げた。
「ちょ…なに？これ…」
「な…なんで……」
そこに立っていたのは夕べ見た、いや、昨晩の夢の中に出て来たと思っていた化け物が、ボロボロになった状態で立っていた。「や…なんで！？コイツ…夢の…」
その時、突然後ろから声が聞こえた。
「おせーんだよ、お前はよぉ！」
その声の方を振り向くと、確かに夕べの少年が立っていた。姿は昨日と違い隣町の高校の制服を着ているが、確かにあの少年だった。奈緒はその少年を凝視し、質問した。
「なんで…あなたと化け物が、ここにいるの？私をこんなとこまで引っ張って来たのはあなた？」
すると、少年は少し残念そうな笑顔を見せ、こう答えた。
「夕べの約束…忘れたわけじゃねーだろ？忘れてなけりゃ、それがすべての答えだ。後は、お前がその化け物をブッ倒した後に教えてやるよ。」
その言葉に奈緒は耳を疑った。
（え…？私がこの化け物を倒す？えっ！？）

「ちょっと！何言って…私は…」
困惑する奈緒を見て、少年は心底楽しそうに笑った。
「くくっ…ほら、よそ見しない。もう奴さんやる気満々みたいだぜ？」
その言葉を聞き、奈緒は化け物の方を振り返る。すると、化け物はすぐそこまで迫っていた。そのボロボロの様子以上に、苦しみと殺気で息を荒げている。
「さぁ、早くしないと食われるぜ？」
恐怖に顔が歪む奈緒をよそに、少年は不敵な笑みを浮かべた。

幕開け～胎動～（後書き）

やっと立ち上がり始めた感じです。ラストまでどれくらいかかるかな？次回からバトルの始まりです。鬼の酒井、よろしく！

初撃〜目覚めの片鱗〜

目の前に立つ化け物。
「化け物を倒せ」
という謎の少年。
この二つの非現実的な出来事に、奈緒は何がなんだか分からなくなっていた。そして、首から生える鎖。その鎖が少年の手に繋がっていることに、まだ、気付くことも出来ずにいた。とにかく、この今の状況が夢であることを祈るしかなかったが、その思いとは裏腹に、その現実―化け物はすぐそこまで迫っていた。足がすくんで動くこともできない。
奈緒はとにかく呟く。「これは夢…そう、夢…夢…夢…」
その様子を見兼ねた少年は、呆れた様子でため息をついた。
「これだから人間は嫌いなんだ。浅はかで非現実主義で。もう少し目の前の現実を受け入れたらどーなんだぁ？」
そう言うと、奈緒に向かって一言。
「おい、女！お前がその右手に持ってるモンは何だ!?単なる飾りか？」
そう言われた奈緒は、ふと右手を見る。するとそこにはいつから持っていたのか分からないが、テニスのラケットがあった。
「え…」
奈緒は何がどうなっているか、さらに分からなくなる。その時である。奈緒の耳に空気を切り裂くような音が聞こえた。上を見上げると、化け物の左腕が、まさに今、無防備な奈緒目掛けて振り下ろされようとしていた。
奈緒は咄嗟に右に跳んでその攻撃を避ける。が、しかし、ホッとしたのもつかの間、次の瞬間には奈緒の左脇腹に化け物のチョップが突き刺さっていた。「かっ…」
奈緒の口から空気と共に苦痛の声が漏れる。数メートル先の地面

に体がたたきつけられた。
「がっ…はっ、はっ、はっ…く…あ…」
今までに感じたことがない痛みに、声が声にならない。
(痛い、痛い…なんで…私がこんな目に…)
頭がぐらぐらする感覚と脇腹の鈍く思い痛みに耐えながら、奈緒はこれが現実なのだと理解し始め、どうにか自分の今の状況を把握しようと努め始めた。
(やっぱり私…昨日一度死んでるんだ…)
そう考えれば今のこの状況―化け物と少年の説明だけはつく。
(…なんで私が、こんな化け物と戦わなきゃならないの?)
奈緒はそこで、夕べ少年に生き返らせてもらう代わりに、少年と交わした『約束』を思い出した。

夕べ少年は、奈緒に生き返らせる代わりに交換条件をのめと要求して来た。
耳元で囁く少年の口から出た言葉。
「人を蘇らせる術は相当霊力を喰うんだ。お前は生き返った後、俺のためにその体と魂を使う覚悟はあるか？俺としてもコッチの世界で楽しむために下僕がほしい。もしお前がこの条件をのむなら、多少の霊力消費にも目をつぶってやる。目の前の化け物も俺がどうにかしてやるし、お前も生き返らせてやる。選べ。どうするかはお前次第だ」
そして、その条件を奈緒はのんだ。そして生き返った。

(なるほど…私は下僕ですか…)
奈緒はとりあえず、昨日の約束を思い出し、そういう事かと理解した。しかし、目の前には昨日の化け物がいる。どうにかしてやる―…つまりは倒してくれる。と理解していた奈緒は、確かに生き返らせてもらいはしたが、その自分が再び同じ化け物に殺されそうになっていることに底知れぬ怒りを感じた。

(でも、今はこの状況をどうにかしなきゃ。また死んじゃう。それに、アイツは私を生き返らせるのには霊力とかってのを相当使うって言ってた。そこまでして生き返らせた人間をそう簡単に殺されたくないだろうし——…本当にやばいときには何かあるでしょ…)

気になることがもう一つあったが、それは今考えていても仕方ない事だと理解した奈緒は、とにかく痛む脇腹を気にしながらヨロヨロ立ち上がった。　その時、耳に少年の声が聞こえて来た。

「ばかやろー。敵の攻撃の外側ににげるんじゃねーよ！逃げるなら内側か後ろなんだよ、ふつー！！」

奈緒は一瞬少年を睨むが、化け物が再びこちらを向いた事で、化け物に視線を戻した。

(…どうする？体格差もありすぎる。持ってるのはテニスラケット一つ…ってかいくら私がテニス部だからってラケット一つで何ができんのよ…)

と、奈緒は苦笑いをする。余談だが、たしかに佐倉奈緒はテニス部、しかも2年のエースである。

目の前に再び化け物が迫る。その時、奈緒は少年に向かって叫んだ。

「ちょっと！アンタ、テニスボールとか持ってないわけ！？」

すると、少年は不敵な笑みを浮かべた。

「やっとやる気になったか！？ボール！？んなもんテメーの足元に何個も転がってるじゃねーか！」

奈緒は足元を見る。

「え…？」

確かに数個のボールが足元に転がっていた。

(さっきまでなかったのに…これもアイツの仕業なの？)

しかし、ゆっくり考えている時間はなかった。また、化け物がすぐそこまで迫っていたのだ。奈緒は2個のボールを手に取る。すると、化け物がすぐ側まで来る前に、バックステップで距離を取った。

不思議とさっきまでの恐怖はない。相変わらず脇腹は痛い、が、

これのおかげで状況把握は出来た。後は化け物を早くどうにかして少年を問い詰めるだけだ。ある程度距離を取ったところで奈緒は止まった。
（とっさに拾って来たはいいけど…普通のテニスボールと白いテニスボール。こんなんで本当にあんな化け物やっつけられんの？）
奈緒は手に持っているボールを見て再び苦笑いを浮かべた。
（こんなこと考えてる間にまたあのチョップくらいたくなんかないし、ま…やってみるだけかっ！）
奈緒は普通のテニスボールの方を頭上に放り上げた。化け物は奈緒がボールを放り上げたのを見て、何か危険なものを感じ取ったようであった。その瞬間、恐ろしい咆哮をあげながら、奈緒に向かって跳躍した。その様子を見て、狙いを定めた奈緒は、自信ありげな笑みを浮かべる。
「飛んで火に入る夏の虫ってーのは、アンタみたいなのを言うのよっ！」
そう叫ぶと奈緒は、ラケットをボールに向かって振る。上回転のかかったサーブ。それは、凄まじいスピードで化け物の顔面に直撃した。
「ガアァァァ！！」
顔にボールが当たり、そう化け物が叫んだ刹那、辺りの世界を凄まじい光と爆音が支配した。
奈緒も一瞬何が起きたか分からなかったが、化け物に当たったボールが爆発したらしい、ということが、目の前で頭が吹き飛びもがいている化け物を見て分かった。
奈緒は目の前の光景を見て、一瞬気持ち悪くなったが、それも本当に一瞬だけだった。人生の中で、何故かそのような光景をよく見て来たような気さえした。そして、奈緒は化け物を完全に消し去るべく、今度は白いテニスボールを頭上に放り上げたの。このテニスボールが炸裂したとき、何が起こるかさえ、今の奈緒には理解できるような気がした。

「さよなら。」
　奈緒はそうつぶやくと、白いテニスボールでサーブを放った。それは、綺麗に化け物に直撃し、次の瞬間には崩れゆく化け物の体を目にした。白いテニスボールは、さっきのように外部からの爆発による破壊ではなく、内部からの崩壊、いや、分解を行うべく、命中すると融解し化け物の体を侵食し始めたのである。
　奈緒は、とりあえず命中を確認すると、危険を回避した喜びを見せる訳でもなく、傍観していた謎の少年の方へ向き直り、その足を踏み出した。そして、歩きながら少年に対し、話を切り出した。
「さて、聞かせてもらうわよ。全部。」
　先程まで奈緒が化け物と戦う様子をただ眺めていた少年は、奈緒からの問いかけに対し、こう答えた。
「いちいち聞かなくても、もう大体飲み込めたろ？なんたって、お前は俺の下僕だからな。」
「そういうわけにもいかないのよ。頭は理解しても心が理解できてないもの。やっぱり、全部直接、聞かせてもらうから。」
　奈緒はそう言うと、少年の前に立ち、手に持っていたラケットを振りかざした。

スッコーン！！

少年の頭を思い切りぶん殴ったラケットの気持ち良い音が、昼間の公園の空に響いた。

初撃～目覚めの片鱗～（後書き）

少年の名前…いつになったら出せるんだ？本当にモヤモヤしてます。そして、何よりも鬼の酒井の本領を早く発揮させてやりたい！かなり反省だらけの３話目（実質は２話目になりますが）ですが、多少は楽しんでいただけていたら幸です。それでは、また。

解～うさん臭い閻魔様？～

奈緒は頭を押さえながら地面を転げ回っていた。それを見て不敵に笑う少年は奈緒に向かってこう言った。

「女、お前に俺は殴れないぞ。仮に殴ってもその衝撃はお前に返るだけだ。」

奈緒は手に持っていたテニスラケットで確かに少年を殴ったハズだった。確かに少年の頭から気持ちの良い音が響き渡った。しかし、気がつくと自分が地面に転がっていた。

（う…こうなるって分かってたハズなのに…）

奈緒は心の中でそうつぶやくと、まだ痛む頭を押さえながら立ち上がった。そして、少年に向かい精一杯の悪態をついた。

「あんた…マジでムカつく……」

「その涙目にその姿じゃぁ説得力ないぞ」

少年は奈緒の言葉など全く気にしていない様子で、そう返した。確かに、今の奈緒は、痛みで目には涙が滲み、ボサボサになった頭を両手で押さえ、足は微妙にがに股ぎみと、まるでコメディアンのような姿になっていた。

「うるさいっ！」

奈緒はまさにコメディーマンガのような顔をして少年を一括する。が、やはり少年には全く気にする様子がない。

「女、俺の事、知りたいんだろ？」

そう言いながら少年の顔のニヤニヤ度があがる。

「いーのか？そんな態度で？知りたいんだろ？俺のしょ・う・た・い」

奈緒は少し飽きれ気味な顔をする。

（言葉攻めのつもり…なのかなぁ………？）

それは少年のニヤニヤが最高潮に達した時だった。

「いーぜぇ？教えてやるよ…俺の正体はなぁ…」

少年は突然真顔になり、少し立ち位地と奈緒から見える角度を補正した。
「あんたが閻魔大王だとか、そんなんは興味ないのよ…」
少年は奈緒に自分の正体を言われると同時に、大きく目を見開いて、口をあんぐり開け、鼻水まで垂らした。
「で、私を下僕とやらにして何がしたいわけ？それにこの鎖、まさかこれからもところ構わず私を呼び出すつもりじゃないでしょうね！？」
そういうと、奈緒は自分の首から生える鎖をつかみ、少年の目の前に突き出した。しかし、その時少年の様子が変わる。
「女、テメェ………俺がわざわざ自己紹介しようとしてる時に先に俺の正体言うんじゃねーよ。こっちはなぁ………」
そう言うと少年は、スゥっと思い切り空気を吸い込み、叫んだ。
「わざわざ構図考えて立ち位置まで変えちまったぢゃねーかよぉぉぉ！！だいたいなぁ、俺はもっと………そう、『俺の正体は泣く子も黙る閻魔大王様だ。舌抜いたろか？』みてぇな感じで読者にカッコよくアピールするつもりだったんだぞー！！」
奈緒の顔がフッと少年を馬鹿にしたような表情になる。
「んなもん知らないわよ。大体ねぇ、読者って何よ、読者って！？」
少年はムッとした顔をしながら話始めた。「ふん、そんな話は置いといて…」
(置いとくんかいっ、その程度の話！？)
「俺がお前を使って何をするつもりかって？」
少年は少しの間考えるフリをし、辺りを見回す。そして、再び奈緒の方へ視線を戻した。
「ま、しばらくは今みたいな化け物退治に付き合ってもらう。そのために今回は夕べの奴を生かしたままにしておいたんだからな。今日、お前にこいつらの片付けかたをマスターしてもらうためにな…」
すると奈緒は、
「なに！？またあんな化け物に会わなきゃなんないわけ！？だいた

いねぇ、今日みたいに変な時間にホイホイと呼び出されたら、こっちはたまったもんじゃないのよ！？」
そう言うと奈緒は、ハッと何かに気付く。そして顔がみるみる青ざめると、少年に向かって発狂したように叫んだ。
「ちょっと！今すぐ私を学校に帰して！」
「？女、何をそんなに慌てている？まぁここにいるお前は魂だけの存在だし、まぁ俺様が許可すればすぐに肉体に戻ることが可能だが。」
「なんでもいいから！早く私を返して！」
少年はこれまでにない奈緒の慌てっぷりを見て、しぶしぶと言った顔をした。
「わーったよ！帰す帰す。その前に女、これから俺の事は『宗明』と呼べ。俺が閻魔になる前、生前からの名だ。それと…」
少年―宗明―は、手に握っている鎖を目の前に突き出し、
「この『双錠の鎖』の呼び掛けには素直に応じることだ。」しかし、奈緒は相変わらず慌てふためいていた。
「あー、もう！なんでもいいから早くして！」
その様子を見て、少年は少し嫌味な笑顔を奈緒に向けた。
「くくっ、鬼の酒井によろしくな。」
宗明の一言に奈緒は目をパチパチさせた。
「あんた―…その事知って……」
次の瞬間、宗明の前から奈緒の姿が消えた。宗明はコの後の奈緒の苦悩を想像して、少し笑いを漏らす。そして、真剣な顔に戻ると、再び宗明は辺りを見回した。
（『羅生門』を開放して来たとはいえ、まさかここまで早く人間に被害が出るとはな…）
宗明は辺りの様子を確認し終わると、空を見上げてため息をついた。
（実際んとこ一部の記憶が混線したのは予想外だったが、どうやら本当の目的は知られていないらしい。それに、そのおかげで予定より早く戦い方もマスターしたみたいだし。ま、女には悪いが、しば

らくは俺の道楽に付き合ってもらうさ。）

そうして、宗明は歩き始めた。記憶の一部混線。これにより、奈緒は宗明の記憶を少し垣間見ると同時に、宗明も奈緒の記憶を一部垣間見ていた。

そして宗明は、奈緒にこれから襲い来るであろう『鬼の酒井』による仕打ちを予想し、少し鳥肌を立てながら、

「名無阿弥陀物…」

と呟いた。

解～うさん臭い閻魔様？～（後書き）

あー、ちょっと失敗が目立つ感じですが、まぁ気にしないことにします。説明や設定紹介が上手く出来ないんだよな～。次回はやっと本当に鬼の酒井が動きます。１番のメインイベントかも（笑）駄文だらけな小説ですが、こんな感じでお付き合い頂けるとありがたいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4069a/

パニック・ソウル！

2010年12月4日05時43分発行